

たき火と焼き芋

(2018.1.05)

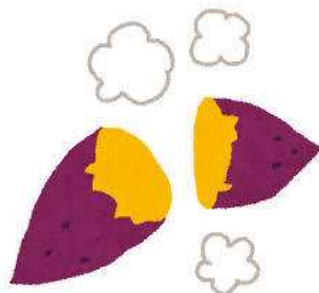


「垣根の、垣根の曲がり角、たき火だ、たき火だ、落ち葉たき・・・」。こんな風景は見られなくなってしまいました。冬を迎え、園では落ち葉がたくさん積もります。そして、芋ほりも終わりました。やらないわけにはいきません。この際、環境問題などと、不粋なことはなしです。「たき火をやろう」と声を掛けると、「たき火ってなあに？」と言う子もいます。「落ち葉を集めて燃やすの、集めてきて」というと、年少さんは、小さな手に3～4枚の葉を持ってくる子もいます。落ち葉たきをやったことのない都会の子も、同じようなことをするだろうと思いました。さすがに年長さんは、経験者なので、大きなカゴにつめたりして、沢山運んできます。自分達の背丈程に高く積まれた落ち葉の山に火をつけると、もくもくと白い煙が上がり、大歓声です。煙の向こうの友達が揺らいで見えます。全体に火がまわると、ホイルに包まれた芋が投げ込まれます。子ども達から「焼き芋、焼き芋、お腹がグー、ホカホカ、ホカホカ、アチチのチ」と焼き芋の歌と手遊びが出て、盛り上がりました。しばらくすると「お芋まだ?」「早く食べたい」と待ちきれない様子です。焼き芋は、出来るまで1～2時間かかるから、お部屋で待ってて、と言って引き取ってもらいました。

焼きあがったお芋を、クラスに持っていくと大喜びです。先生が小さく切り分けて、小さな掌に配りました。しかし、一クラスで、小さな芋が2～3本です。ほんの一口サイズです。一口でペロリと終わってしまいます。子ども達は、小さな手を差し出し、「おかわり」「もっと欲しい」と言います。先生は仕方なく、残ったかけらを更に小さく切り分けて、一粒ずつ分けていました。

その夜、夢に見ました。子ども達が「もっとちょうだい」と差し出す小さな手と欲しがる顔が・・・。そして、その翌日のこと、年少さんが落ち葉たきごっこをしていたことを、先生から聞きました。小さな落ち葉の山に、手をかざし、私がやっていたように、落ち葉の山に木を突っ込んで、持ちあげ火を起こす仕草を真似し、中に入った紅葉を炎に見たてていたことなど、とても可愛かったとのことでした。

強く決意しました。「もっといっぱい焼き芋をやるぞ!」と。焼き芋用の芋をたくさん買って、意気揚々園に向かいました。前回よりもうず高く積み上げられた落ち葉に、沢山のお芋が投げ入れられました。大きな落ち葉炊きです。私は汗びっしょりです。沢山焼き芋を食べることができ、子ども達は満面の笑顔で「焼き芋、焼き芋、アチチのチ・・・」と歌っていました。私が事務所に戻る際に、「園長先生待ってー」と子ども達が追いかけて来ました。立ち止まると、「今日は焼き芋ありがとう!」とおじぎをしました。寒い日でしたが、私の心はホカホカになりました。



雪合戦ができなかった園長

(2018.2.01)



「雪やコンコ・・・犬は喜び庭駆けまわる」。関東地方にも雪が沢山積りました。雪が降ると喜ぶのは、子どもと犬と幼稚園の先生。何故かワクワクするのです。何故ワクワクするのでしょうか。雪景色の中で、楽しく遊んでいるイメージが湧くのです。反対に、大人は雪かきなど余計な仕事が増えたり、通勤に苦労したりすることが連想されるので、「積もらないでくれ!」と思うのでしょうか。

22日(月)の夕方から、急にボサボサと降り始めたので、各園に「早く帰るように」連絡した後、仕事を続けていました。机から顔を上げると、外はかなり積もっていました。あわてて帰る準備をすると、道路もかなり積もっていました。殆ど走っている車はありません。慎重に運転して家に着くと、長靴をはいて、直ぐに、近くの公園へ行きました。一面の銀世界です。公園の外灯に照らされて、白いフワフワの雪景色です。何だかロマンチックな光景でした。心の中でヨーシこれなら雪合戦・雪だるま・ソリすべり、いっぱい遊べるぞ!と思わずほほえんでいました。子ども達がやっていたように、光に照らされチラチラ降り注ぐ雪に口を開けてみましたが、雪は口の中に入っているのか分かりませんでした。人が見たら、頭のイカレタお爺さんと思ったでしょう。

雪まみれになって玄関に入ると、カミさんが、何やってたのよ!と口を尖らせました。公園に行って来たこと、いっぱい雪が積もっていたこと、明日はいっぱい遊べそうでワクワクしていることを伝えると、「いいジイさんがバカみたい」と叱られました。

翌朝、早目に龍ヶ崎の園に向かいました。いつもの道をトロトロ走って行くと、橋の手前の坂が渋滞して動きません。時間が経つばかりで、この日の午後は来客もあったので、これでは幼稚園に着く頃には、帰らなければなりません。「明日もあるから」と諦めて帰ることにしました。その翌日、園に着くと、職員室に入らず、そのまま外で子ども達と遊ぶことにしました。すぐに「雪合戦」とばかり、柔らかい雪を見つけて投げました。子ども達も応戦してきました。直後にガッンと石をぶつけられたような衝撃を後頭部に受けました。「イデテ」と頭をかかえ、「石はだめだよ、怪我しちゃうよ。」と振り返ると、呆然とたたずんでいる子がいました。「石ではないよ」と指差す先に、少し雪のついた氷がありました。一瞬にして戦意喪失。危険なので雪合戦は止めました。ソリをしようとする、「園長先生はデブだからソリが壊れちゃうよ」と貸してくれません。強烈な寒波のお陰で、今でも、北竜台は雪の世界ではなく、氷と雪解けの泥の世界です。やはり、雪の後は嫌です。



お母さんの方が怖いもんねー

(2018.3.01)



豆まきの日の朝、外を見ると大雪だった。これなら前回の雪のリベンジで、鬼と子ども達の雪合戦ができると、ワクワクして園に向かいました。バサバサ降っているわりに、道路に雪はなく、少し不安になりました。園に着くと、前日まで凍っていた庭は雪がなく泥んこになっていました。みぞれと湿った雪だったのです。仕方なくホールで豆まきとなりました。節分の由来と立春、冬から春に移っていくことを話し、邪鬼を払い春を迎える喜びと、春になるとみんなも一つ大きくなって、進級・卒園し小学生になることを伝えました。そして節分の会が始まりました。子ども達は、豆まきの歌、鬼のパンツの歌などで盛り上がりました。豆を配ってもらい「鬼なんか恐くないぞ！オー！」と氣勢を上げると、急にガラガラ、バリバリ、ドスンと雷の音が響き、同時に鬼が、ガオー、ウオーと叫び「ナニー、オレ様をやっつけてやるぞ、オニはソトだと？お前ら一人残らず食ってやる」の声と、ドスン、バチンと金棒を振り下ろす大きな音がします。子ども達が立ちすくみ、凍りついたところにド迫力の大鬼が登場、金棒を振り回し、先生にしがみついて、阿鼻叫喚の子はそっとして、元気な子達を追廻し、捕まえ、担ぎ上げます。泣きながら気丈に豆を投げている子や、豆をぶっつけながら逃げ回る子もいます。鬼も汗びっしょりになり、「参りました。ふたばっ子は強い！どうか許して下さい」とひざまずいて謝ります。面を取ると、「園長先生とケイジ先生と分かっていたよ、全然恐くなかったもんね」と、先ほどまで大泣きしていた子が言います。

昼食は、鬼のトラウマを解消するため、大泣きしていた年少児のクラスに行きました。「園長先生、ここに座って」とみんなに呼ばれました。特に大泣きしていたA子ちゃんの隣に座りました。A子ちゃんが「鬼なんか全然恐くなかったもんねー。うちのお母さんの方がずっと怖いんだから」ととんでもないことを言い出しました。「鬼の顔は怖かったでしょう？」と言うと「お顔だって、お母さんが怒った時の方がずーっと恐いんだから、お父さんだって怖いと言ってたよ。」「それではお母さんが嫌い？」と聞くと「いつもはかわいいの、大好き」と。子ども達はみんな怒られても怖くても、お母さんが大好きなのです。遠くに座っていたB君が、あんなに泣いて先生にしがみついていたのに、「僕が、いっぱい豆をぶっつけて鬼をやっつけたから、鬼がゴメンナサイしたんだ」と大声で言い張っていました。彼が大泣きしてたなどと言わず「B君は強いんだ、もうすぐ年中さんになるんだもんね」と言うと、みんなも「僕も強いよ！」と胸を張っていました。前に座っていたCちゃんが「春になったら、私、お姉ちゃんになるの、幼稚園に小さな子来るから」と言いました。子ども達も大きくなって、もう春です。



ウソつくな！ ズルするな！正々堂々と

(2018.5.01)



大河ドラマ「西郷どん」が放映されている。薩摩の郷中教育と会津の仕の掟で、共通している教えがある。ウソつくな、卑怯な事（ズル）をするな、弱い者いじめをするな、ということである。私は、東京の下町で育った。戦後間もなくの下町は、ベビーブームだった。子ども達は、いつも群れて遊んでいた。どこの家庭も子沢山だった。親は、教育熱心だが食べさせることに夢中で、子どもにかまってはいなかった。その分、子ども達は自由で、朝から晩まで遊ぶことができた。年長者に連れられ、集団で遊んだ。その中で集団のルールや、長幼の序など、人間の生き方を学んだ。メンコ、ビー玉、ベーゴマなど、賭け事に近い勝負もあった。そこでは、決してズルは許されなかった。技術、知力、胆力、勇気、思いやりのある者が、尊敬を集めガキ大将になった。決して腕力だけではダメであった。スリルのある真剣な遊びには、厳しいルールがあった。ウソをつく、順番を守らない、ルールを破るなど、ズルをすると途端に「キタネーゾ、ズルイゾ」と非難された。子ども達は、ズルをしない、ウソつかない、正々堂々と遊ぶ（勝負する）ことを学んだ。

国会での「モリ・カケ」のやり取りを見ていて、この人達は幼児期に大勢の子ども達の中で遊んで育ってないのだ、と思った。高学歴で政官のトップにいるのに、ウソ、ズルで正々堂々としていない。お友達に特別の便宜を図ったり、10億もする土地をただ同然にしたりして、それが明るみに出ると、ウソをついたり隠したり、本当のことは話さず、真実を隠し続ける。勉強ばかりして、東大に行ったり、名家のお坊ちゃまとしてヌクヌクと育てられ、集団の中で「ウソつくな、ズルするな、正々堂々と生きろ」と教えられずに育った人々なのだ。ふたばでは、教育勅語を暗唱させたり、「〇〇夫人、〇〇総理大臣をいつも支えて下さり・・・」と唱和させたりしない。意味のないことを暗記させたりせず、ウソつくな、ズルするな、正々堂々と生きろ、と育てている。政官のトップにいる人は、東大や、お坊ちゃま大学に行くより、ふたば文化こども園に来ればよかったのに・・・。



隊長解任！

(2018.6.01)



初夏を思わせるカラッと晴れたお天気に誘われて、お散歩に出かけた。園長先生が探検隊長だから、注意をよく聞くようにと伝え、「出発！オー」の掛け声、勇ましく出発した。擦れ違うおじさん、おばさんに大きな声で元気に「コンニチワー」と挨拶、「明るくて元気ですね…」「気持ち良いあいさつで、気分が良くなりました。」と誉められて、こちらもととても良い気分になった。途中で、病院の看板など、平仮名と片仮名だけを読んで眼科クリニック？眼科は目のお医者さん、ここは小児科こどものお医者さん・・・など、自分の経験した情報を交換し合いながら、つつじが満開になった道を進んだ。消防署では、署員に説明してもらい、消防車をグルッと一回りした後、隣の農協を覗き込み、精米機を見て、お米を脱穀する機械だと説明した。しばらくすると田圃道に出た。つないでいた手を離し、自由に歩いた。タンポポの綿毛を飛ばしたりして行くと、すぐに園の近くの裏通りに来てしまった。先頭集団の年長児は「エーもう終わり、これじゃー探検じゃないよ！」と口を尖らせた。目の前には園の裏山の荒れ果てた雑木林がそびえ立っていた。

子ども達の中から「K先生とこの森を探検したことがある。」と声が上がった。崖が崩れ、少し空間ができているところを指さし「ここから幼稚園まで行けるよ」と言う。少し心配になったが、やる気満々の年長児に急かされるように「では探検に行こう」ということになった。崖を登って少し進むと、倒木だらけ、数十年手を入れていない、うっそうとした昼なお暗い、篠竹と雑木が密生して、茨やトゲのある木に前進を阻まれる。子ども達をケガさせてはならぬと、茨を倒しながら進むものだから、先頭の隊長の腕は傷だらけ、血だらけ。半ベソで「こんなところについてこなければ良かった」と言う子。私も来なければ良かったと後悔していたが、A君が、「オレ達は、もう年長なんだから、そんなこと言うな、頑張れ！」と叱咤した。悪戦苦闘したが、とうとうこれ以上は危険だと、撤退を余儀なくされた。後ろを向いて、「オーイ、引き返すぞ」と言うと、元気なグループが「頑張れば行けるのに」と言う。それでも、引き返すことに同意してくれて、今来たルートに戻った。

帰路、今まで先頭集団だったが最後尾になった年長児たちの話し声が聞こえた。「もう、園長先生は隊長だめだな」「体操の先生じゃないしな。」するとA君が、私を弁護してくれたが、もっと落ち込むことを言った。「そんなこと言うなよ！園長先生だって頑張ったんだから、仕方がないだろう、おじいさんなんだから…、」と、とほほ・・・。「その通りです。」私は自分の年を自覚し、ガックリと肩を落とし、無言のまま彼らの後に従った。サッカーのハリル監督の心境が少し分かった。しかし、ふたばっ子は優しい。必ずフォローしてくれる。降園時に「園長先生、又隊長になって、探検に連れて行って。」と言うのである。「よーし！次は安全な森林公園に連れて行くぞ！」と声には出さずに心に誓ったのであった。

解任

ルールを守ること

(2018.7.02)



規範・規則がゆるくなった。ルール（規則）を守ること成り立つスポーツの世界でも、規範を作っているはずの政治の世界でも、規範が守られていない。自由主義の世界では自由貿易が原則である。自国中心、もうかれれば良いと、「保護主義」に走るのは反則である。勝利至上主義、勝つためには何をやってもいいという訳はない。5月の園便りで「正々堂々」という話をした。モリ・カケに始まり、アメフト、トランプ。ウソ（フェイク）・ Netz造・反則が横行している。ウソ・ Netz造・反則ばかりなので、国民もマヒして鈍感になっているのか、政権は安泰である。

ホイジンガーが「ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）」の中で、人間の文化は「遊び」の中で生まれたと、述べている。スポーツも「遊び」の中で生まれた。「遊び」の中では、行き過ぎを防ぎ、楽しくやるためのルールが作られる。子ども達の「遊び」も同様である。自己実現するために、全身全霊をかけ、ルールを守り、正々堂々と戦い、夢中になって挑戦するから、人格が磨かれ、前より前進した自分が作られる。遊びの世界では余裕があり、厳しくとも、楽しさがある。強制されたり、比較されたりしない。自由で自主的である。それが、どうだろう。「勝たなければ全てダメ」という勝利至上主義、スポーツの目的から離れた商業主義、過度の競争、記録の追求、苦しさばかり増えて、楽しさ、余裕がなくなっている。

TVで、バレーボールのスーパーコーチに指導を受けた中学生のことが放映されていた。練習の最後に、強豪ママさんバレーボールチームと対戦することになって、接戦の末、逆転されて1点差で敗れた。コーチは「残念、悔しい！」とは言わず、なんと「おめでとう。とても良かった。」と言った。そして一人一人に、昨日より良くなっている点を挙げて「良いプレーだった。素晴らしい！」と声をかけていた。勝ち負けより、一人一人が昨日より成長し、自己充実していることが重要であることを自然に表現し、中学生に体得させていた。中学生は涙などなく、満ち足り、輝いて、自信に溢れる表情をしていた。反則のならず者両首脳や、商業主義・金まみれのIOC、スポ根の監督をはじめ、ルール違反の大人達に見せたかった。そして、私達みんなが、もっと余裕を持ち、自由で、楽しい「遊び」を大切にして、ルールを守り、正々堂々と生きるようにしたい。



子どものケンカ・・・自我の確立と他者との協調

(2018.9.03)



十月八日は体育の日。例年、子ども達の体力低下と体の異変の記事がニュースになる。幼児教育の研修会の内容も、知育に関わるものや障害児の対応、食育(アレルギー)、等々ばかりで、「体育的活動」「遊び」は見られなくなった。子育ての基本は「食う・寝る・遊ぶ」「早寝・早起き・朝ごはん」である。知育についても、体力、健康と学力の相関関係が発表されて久しい。文科省が食育など言い出すとみんなそこになびいてしまうが、食育より、運動不足と肥満の方が問題である。最近、子ども達が自由に、思い切り遊ぶ環境がなくなった。元来、子どもは活動的であって、何事にも興味・関心を持ち、意欲的である。できないことにもチャレンジしたが、しかし、最近の子ども達は、新しいことにはチャレンジしたくない傾向がある。僕はそれをやったことがないから出来ないと言ひます。やったことがないことは出来ないかもしれないが、僕なら、きっと出来るようになるとチャレンジするのが「ふたばっ子」である。

子どもが本来持っているチャレンジ精神が、どんどん劣化している。原因は、チャレンジすることをどんどん取り除き、禁止していることである。危ないから、ケガしたら大変だからと、何でも取り除き禁止してしまう。本園の園庭に三角小屋がある。遊具メーカーのものは、両面にスベリ止め用の横棒が付いて、登りやすく、かなり低い。これでは子ども達にとっては、おもしろくない。もっと高くして、片面はスベリやすくして、登るのが難しくなっている。子ども達は、登りにくい片面から登ろうとする。難しいから、出来ないから、チャレンジ魂を刺激する。危ないから取り除いては、子ども達の成育する環境を劣化させ、子ども達の心と体を劣化させる。

ある幼稚園を見学に行った時、園庭を走って来る子ども達に、若い先生が「走ってはだめー」と制止した。私は、その先生に「最近、子ども達がケガをして、保護者からクレームがあったでしょう」と言った。「でも、平らな園庭で走れなければ、子ども達はどこも走れないよね。辛かったでしょう。でも、子ども達のために、頑張ってるね」としか言えなかった。先生は涙ぐんでいた。幼稚園の先生が辞めたくないのはこんな時だ。少し高いところがあれば、登りたくなるのが子どもだ。そこから飛び降りたくなるのが子どもだ。低いところから飛び降りて、どこかを打った、と言って、怒鳴り込んで来た人がいた。しかも、ケガひとつしていないのにである。ころんでころんで子どもはしっかり歩き、走れるようになる。できないことが出来るようになった時、恐怖心を克服しチャレンジできた時、できそうもないことに、何度もチャレンジして出来るようになった時、「僕はできる! 私はすごい」と、自尊感情を抱き、有能感を育て、意欲・忍耐力を心の中でふくらませる。

こんなに活発に動いているのに、幼稚園では大きな事故や、ケガはほとんどない。骨折など大きなケガは、家庭で起きることの方が十倍以上である。数年に一度ぐらいは幼稚園で骨折することはある。それほど幼稚園では安全に注意しているが、あれもこれも禁止するようなことはしない。園長が「うちでは子ども達がケガをしたことがない」と自慢していた園に行ったところ、子どもは、ほとんど指示命令で動いていて、園庭のブランコも取り外していた。子どもは、自由にのびのびと活動させたい。ふたばは、心も体もたくましい子ども達が育つところだ。安全には十分に注意するが、子どもが自由に遊んで、ころんでケガすることを恐れる人は他の園に行ったほうがいい。ふたばは、安全で、自由な子どもの楽園だ。

食う・寝る・遊ぶ・・・こどもに自由と活動を

(2018.10.01)



十月八日は体育の日。例年、子ども達の体力低下と体の異変の記事がニュースになる。幼児教育の研修会の内容も、知育に関わるものや障害児の対応、食育(アレルギー)、等々ばかりで、「体育的活動」「遊び」は見られなくなった。子育ての基本は「食う・寝る・遊ぶ」「早寝・早起き・朝ごはん」である。知育についても、体力、健康と学力の相関関係が発表されて久しい。文科省が食育など言い出すとみんなそこになびいてしまうが、食育より、運動不足と肥満の方が問題である。最近、子ども達が自由に、思い切り遊ぶ環境がなくなった。元来、子どもは活動的であって、何事にも興味・関心を持ち、意欲的である。できないことにもチャレンジしたが、しかし、最近の子ども達は、新しいことにはチャレンジしたくない傾向がある。僕はそれをやったことがないから出来ないと言ひまする。やったことがないことは出来ないかもしれないが、僕なら、きっと出来るようになるとチャレンジするのが「ふたばっ子」である。

子どもが本来持っているチャレンジ精神が、どんどん劣化している。原因は、チャレンジすることをどんどん取り除き、禁止していることである。危ないから、ケガしたら大変だからと、何でも取り除き禁止してしまう。本園の園庭に三角小屋がある。遊具メーカーのものは、両面にスベリ止め用の横棒が付いて、登りやすく、かなり低い。これでは子ども達にとっては、おもしろくない。もっと高くして、片面はスベリやすくして、登るのが難しくなっている。子ども達は、登りにくい片面から登ろうとする。難しいから、出来ないから、チャレンジ魂を刺激する。危ないから取り除いては、子ども達の成育する環境を劣化させ、子ども達の心と体を劣化させる。

ある幼稚園を見学に行った時、園庭を走って来る子ども達に、若い先生が「走ってはだめー」と制止した。私は、その先生に「最近、子ども達がケガをして、保護者からクレームがあったでしょう」と言った。「でも、平らな園庭で走れなければ、子ども達はどこも走れないよね。辛かったでしょう。でも、子ども達のために、頑張ってるね」としか言えなかった。先生は涙ぐんでいた。幼稚園の先生が辞めたくないのはこんな時だ。少し高いところがあれば、登りたくなるのが子どもだ。そこから飛び降りたくなるのが子どもだ。低いところから飛び降りて、どこかを打った、と言って、怒鳴り込んで来た人がいた。しかも、ケガひとつしていないのにである。ころんころんと子どもはしっかり歩き、走れるようになる。できないことが出来るようになった時、恐怖心を克服しチャレンジできた時、できそうもないことに、何度もチャレンジして出来るようになった時、「僕はできる! 私はすごい」と、自尊感情を抱き、有能感を育て、意欲・忍耐力を心の中でふくらませる。

こんなに活発に動いているのに、幼稚園では大きな事故や、ケガはほとんどない。骨折など大きなケガは、家庭で起きることの方が十倍以上である。数年に一度ぐらいは幼稚園で骨折することはある。それほど幼稚園では安全に注意しているが、あれもこれも禁止するようなことはしない。園長が「うちでは子ども達がケガをしたことがない」と自慢していた園に行ったところ、子どもは、ほとんど指示命令で動いていて、園庭のブランコも取り外していた。子どもは、自由にのびのびと活動させたい。ふたばは、心も体もたくましい子ども達が育つところだ。安全には十分に注意するが、子どもが自由に遊んで、ころんころんとケガすることを恐れる人は他の園に行ったほうがいい。ふたばは、安全で、自由な子どもの楽園だ。

SNS

(2018.11.01)

NOVEMBER 

トランプやポピュリストは、SNSやツイッターなどが大好きなようですが、私は全く好きになれない。本当はよく分からない。他人の評価や噂には興味がない。他人が人のことを勝手に評価して良いのかと思う。茨城が人気度最下位というの、守谷が住みたい街第一位というの全く同意できない。どうやって決めたのか、何人の人がそうした評価を下したのか判然としない。一部の三流紙が、ごく一部の人の評価を参考にして決めたのではないかと思う。他人を評価したり、決めつけたりするのが好きな人がいる。茨城にはいろんな人がいるのに、「茨城県民は〇〇だ」と決めつけたりする。日本人はA型血液の人が一番多く、40%近くに達するそうであるが、A型人間は全て「〇〇だ」と決めつがる。A型だろうがB型だろうと、人間はみんな一人ひとり違っている。だいたい血液型で人をうんぬんするのは日本人だけ、外国で「血液型は何？」と聞くと、この人は輸血を求めているのかと怪訝な顔をされる。

ヤフーで検索すると、幼稚園の評価・口コミが出てくると、友人から知らされた。友人がスマホを開くと、茨城県内の幼稚園・こども園のランクが出てきた。驚いたことに、私がこんな幼稚園は子ども達のために決して良くない、と考えている園が上位になっていた。ちなみに双葉学園の中の一つの園を検索してみると、とても評価が悪くなっていた。たった5人の人だけが書いていた。4人の人が5段階評価の4.5~5をつけていたが、一人の人が3であったので、全体の評価が下がっていた。ここで気付いたのが、たった5人の評価でも、全体としての評価になり、一人でも5の評価をすると5になって最高の評価になる。もう一つの問題は、こうした評価は、かなり個人的に偏ったものである。3と評価した人も、「子どもにとっては、本当に素晴らしい良い園である。」と言ったあと、母親にとっては行事が多い（行事は出たくなければ出なくても良いのです。あくまでも参加自由です。）サークル活動が多い（サークルは参加自由の任意団体で、園は介入しない。）ということが評価を下げている理由だった。幼稚園は「子ども」のためにあるものであって、子どもにとって素晴らしい良い園であるならば、そこで評価は100%決定されると思っていたので、その評価の内容について、啞然としてしまった。

子どもよりも、お母さんの都合が優先される、そういう時代になったのだ。そういえば、県内の上位を占めている園も、みんなそうだ。狭い室内にギュウギュウで、指示・命令・訓練・教え込みで、自由がなく、遊びも制限され、楽しい幼児期を奪ってしまっても、お母さんの事情が優先される。決めるのは母親だ。「保護者会はありません。お手伝い活動はありません。」とうたっている園が増えている。

最後に「ふたばは、子どものための楽園である！」そして、保護者も一緒に子育てを楽しむ園であり続ける。



子ども達の時間

(2018.12.01)



昨年、つくばエクスプレスが20秒早く発車して、謝罪文を出したという「事件」があった。時間を間違えたことについての苦情はゼロであったのに、わざわざ謝罪の広告を出したことが「事件」であった。そのニュースが海外で話題になったという。日本らしい、と笑われているのだろう。海外を旅行していると、時刻表なんて、あってもないと同じで、一応の目安というところ。バスなどに至っては、早く行ってしまうたり、数十分遅れて来たかと思うと、2～3台まとめて来たりする。みんな文句を言わず、当たり前のことと思っている。

時間に正確なのは良いことであり、大勢の集まりの時など、遅れて来る人が悪いので、定刻に始めても良いと思うが、20秒の時間の間違いは何の問題もない。謝罪する方がおかしい。あまり時間に厳格なのは息苦しい。1～2分の遅れで、あわてて事故を起こしたら大変である。言い訳めいているが、私は時間に正確な方であるが、遅れそうな時もあわてない。遅れることがあるのはしょうがないと思っている。

「遅れそうだな、でも遅れても仕方がない」と、あわてずに行くと、大概遅れないものである。但し、予定時間は守るべきである。

子ども達と生活していると、時間を忘れてしまうことがある。生活と言ったが「遊び」と言った方がいい。子ども達は夢中で遊んでいると、時間を忘れてしまう。否、忘れてしまうというより「遊び」には時間がないのである。遊びは、それほど夢中になるものである。余談だが、仕事でも勉強でも、それが「遊び」にまで昇華され、プレジャーになった時、最も成果が上がる。

子どもの時は、大人とは違う。子どもと生活していると、元々時は自然と感覚とつながっているのではないかと、思うことがある。

時間がたつのも忘れるほど夢中になって、今の子ども達は遊んでいるだろうか？私の子どもの頃は、学校から帰ると、ランドセルを玄関に放り投げ、友だちと夢中になって遊んでいるうちに、辺りが急に暗くなって、腹時計がグーと鳴って、「もう夕方だ」とあわてて家に走った。

昼食後、お部屋で遊んでいた年少児のクラスで、外を見ると、真っ黒な雲がやって来て、辺りが急に暗くなった。すると、子ども達が急にざわついた。A君が、「もう、夜になっちゃう、早くお家に帰らないとお母さんが心配する」と、ロッカーに走り、リュックを背負って帰りの支度を始めた。子ども達は、自然の中で時間を感覚的にとらえている。子どもの生活は、時間に追い立てられず、自分の感覚でゆったりと時の流れを感じるものであることが良い。

